THE Olympic Golf Club

AUGUST 2004 VOL.10

開場15周年を迎えて

出席者　大川　清・安藤孝雄・上田秀子
大谷昌広・西村司郎

聞き手　五嶋雅徳・川島好彦

開場15周年を迎えるにあたり、開場当時からオリムピックゴルフ倶楽部のことに詳しい方ご存知の方から開設当時のご苦労やその経緯のお話、主要競技の歴代優勝者からその思い出やコース攻略法、女性会員から見たご意見、さらにはオリムピックゴルフ倶楽部が今後もっとよくなるにはどのようにすればよいのかと広範囲に亘り語ってもらいました。

開場するまで

五嶋「安藤さん、まず最初にあいうえお順で言っても『あ』で最初ですし、開設当時からご存知であります安藤さんに15年以上前の用地買収のご苦労話などをお聞かせいただけますか」

安藤「理事長、会長の大川さんとはゴルフを通じて開場するはるか以前の15年程前から存じ上げておりまして、大川さんがゴルフ場を開発するのであれば、どんなかたちであろうがお手伝いしようということで開設当初からかかわっていました。私が伊藤忠商事の西村司郎さんを大川さんに紹介した経緯もありまして、西村さんからもゴルフ場開発を手伝えと、当然大川さんからも手伝うように依頼を受け用地買収から全てお手伝いさせて頂きました」

五嶋「用地買収のときの苦労話をお聞かせいただけますか」

安藤「一番に挙げられるのが立木権という問題ですね。川崎重工業さんの約18万坪の土地に隣接してます地元の共有山林の一部が虫食いにされていて、これを解決するのが大変でした」

西村「当初の経緯を申し上げますと当時の伊藤忠建設部本部長若林信三に川崎重工業から土地を売却したいと、もともと川重が福利厚生の目的で保養地として買収した土地なんですけど、それを断念しゴルフ場用地としてどうか、誰かゴルフ場をしたい人がいれば、という話があり大川会長に持ちかけたのが始まりです。そして、その土地は全部まとまっているという話で、非常に錯覚なところから始まった話なんです」

大川「私に最初話があったのは、若林本部長から電話があり『大川さん用地でいいのあるよ！』ということで、その日のうちに朝電話かかってきて、昼から見に行こうということで二人で見に行ったんです」

西村「ところが地元に入って初めて川重の隣接の二つの村の何十件もの用地買収をする必要があることが分かり、そのことが分かっていたら、話に乗らなかったかもしれません。まとめるのに、相当時間かかりましたね。82年から交渉に入り着工まで・・・」

安藤「5年ですね」

大川「やはり、西村さんが一番苦労されましたね」

西村「いいえ、えー」

大川「私のほうの親子三人と西村さん、担当の平山啓行さんとそれから富士土木、で、後からこんどは安藤さんにも頼んで、1年間に村で会議を100回以上開きました」

安藤「99回 やってますね」

一同「ワッハハハ」

大川「いや、100回超えた。年によっては100回超えました」

五嶋「もう一度整理すると、必要用地の半分位を川

重が持っていて、残りの半分の買収でご苦労されたということですね」

大川「川重指定の不動産会社と名乗る業者が、これが後で見たら実は不真面目な人だったんですね。これにひっかかってひどい目にあったんですよ。結局、その人に虫食いに入られ、ひどい目にあいました」

西村「でも、当時川重の総務部の担当の桑畑佳主巳さん、いまメンバーでいらっしゃいますが非常に協力してもらいましたね」

大川「そう、当時の川重の相談役の大西　胖さん、そして専務の中井善夫さん、後に副社長になられましたが、川重さんの皆さんは、本当に紳士的で協力的で、一生懸命して頂きました」

試掘権？

大川「虫食いにあってから地上の立木権とか、土地の権利以外では試掘権の問題もあって保全しょうという話になりましたね」

西村「その当時、試掘権の問題で事件を多く起こしてるから、先に掛けましょうということで」

大川「なにか、先に登記するほうが勝ちらしいんだ。ひとの土地でも関係無いらしいんです」

川島「え！別のところに掛けれるんですか？」

大川「そうそう、だから地下に埋蔵されているものを掘る権利は、これは地主でなくても登記できるらしいんです。そういうことや、なにかと、やってみると難しいことといっぱいありましたね」

安藤「試掘権と言うのは、例えば鉱山であるとかそういうのは、通産省のほうなんですよ。それで、土地だとか、立木権は法務局のほうの登記ですんで、試掘権は謄本上、全然表れないんですよ」

大川「試掘権が登記されてたら、さわれない訳です」

西村「おおもめになってたね。試掘権の登記がされてたら」

五嶋「色々なものが絡んできて、いろいろとご苦労なされたんですね」

コース設計 クラブハウス建設にあたり

五嶋「では、用地買収に続きまして立派なクラブハウスを造られたご苦労話だとか、設計がなによりも大川会長自らコース設計するにあたってのお話をお聞かせ頂けますか。」

大川「ゴルフを長年やっているのと、あのころレギュラーの世界アマの試合にも出てたし、かなりの世界の名コースを一人で既に見てまわって勉強してました。ですから、本設計に入る前にも、直接コース造ってくれる西武建設の担当者と、それから伊藤忠さんからは平山さんと蔵建築設計から2名、土木設計事務所から一人、そして私と大川専務の7名で英国と米国に渡り勉強に行ってきました。クラブハウスのデザインは、英国の古城の専門誌を専務が見つけて、その中1つの写真を見せながら『このお城をクラブハウスのデザインにどうですか』と言うんで見ましたら、これが、なかなかいいんですよ。英国のナショナルトラストが管理していて一般にも公開していることが分かりそこまで見学に行きました。それから、ゴルフコースはまず『セントアンドリュース・オールドコース』に行って、次にスコットランドの最北端にあるリンクスコース『ロイヤル・ドーノック』を見てまわって、今度は米国に渡ってノースキャロライナ州にある『パイン・ハースト』にいきました。このコースを設計したのが『ロイヤル・ドーノック』出身のドナルド・ロスで、そこにはゴルフコースが8コースあり、一番良いのがNo.2と言うのがあって、これは何ともいえない趣があって、造り上げたっという感じが全く無くて何ともいえない、本当に自然な感じで、コースの中にいるとお母さんの懐に抱かれたような安堵を感じる。それでいてプレーして見たらなかなかハードなんですよ。易しく見えてやはり、設計者の意図する所があって。

そこへ打っていけばパーが取れやすいが、それをちょっと無理して打っていったら怪我をするとか、何ともいえない素晴らしいコースで、そのことが頭から離れない。それから、ロスに来て、『リビエラ』をまわりました。帰ってからも随分と世界の名コースを見に行きました。まー、本当にね、随分と歩きましたよ。まー、コース設計で一番私が思うのは、これみよがしに造り上げたということ、あまりに人工的過ぎることが私は好きじゃない。長年ゴルフやってるうちに、その一　自然が自然に帰ること、人工100年たったら自然に戻るような、そういう思想が私は一番好きになったんですね。そして、危険が無いということ。どっかにボールが当たってはね返るとか、見通しが悪くて危険なコースだとか。まー、だいたいそういうつもりで造ったのがこのコースなんです」

五嶋「世界中の名コースを見られて、感じられたものを表現されたんですね」

大川「あくまでも素人が考えて、いちゴルファーとして造ったものですから、これは専門家から見たらどうかわかりませんが。当時ベントのワングリーンのコースは殆ど日本にはなかったので、わざわざアメリカの友人とシカゴまで研究に行ったりもしました。シカゴと大阪の気候とよく似ているんですよ。夏は湿度が高くて暑くて蒸す、で、これがベントグリーンの管理で一番難しいんです。それで、現地のキーパーに色々尋ねて勉強したりもしました」

五嶋「そういうご苦労があって平成元年に開場したと言うことですよね」

主要競技優勝者の登場

五嶋「オリムピックゴルフ倶楽部といえば、先々週位から高橋勝成プロがゴルフネットワークの『秘伝 プロの技』という番組で、このコースはプロでも攻めあぐねるような難しい面とほっとする面と緑が美しいと言う事や大川会長の話を色々されてますが、どうでしょう、今まで主要競技に優勝された、まずクラブチャンピオンの大谷さんは、何回獲られたんですかね？」

大谷「5回ですか・・・」

五嶋「すごいですね」

五嶋「グランドシニアは今日いらっしゃらなくて、

シニアチャンピオンは安藤さん、レディースが上田さんで5回獲られてますね。これもすごいですね。西村さんがオーナーズカップ、これは開場の翌年なんですね。では、お一人づつ思い出話をどのようにお聞きしましょうか、川島さん」

川島「そうですね、ゴルフ場の部分と試合の思い出の部分と、まず大谷さんからお聞かせ願いますか」

大谷「平成2年度に入会しまして、それまでも何コースか入っていたのですが、そこはもっと古いタイプのコースでしたので当時入ってましたのが、オリムピックに入ったのを契機にゴルフの内容というか質というものが、がらっと変ったのを記憶してます。大川会長の思いのこもったコースと飛距離の面でも技術の面でもがんばってやらないといけないなと言うのが一番の印象でした。オリムピックに来てから本当のゴルフに目覚めました。挑戦しては負けて、挑戦しては負けてと、特に18番では何球ボールを池に入れたかわからないです。技術的にも大川会長から一言、二言アドバイスを受けたことを練習で実行するうちに、あっと言う間にハンディが下がっていきまして、本当に自分のゴルフの基礎をオリムピックで学び育ったと言えます。その後、平成4年に目の手術をし、その時はもうゴルフ出来なくなるのではと心配しましたが、無事、何とか復帰できて平成5年度に初めて決勝で延安賢一さんと対戦して、優勝できたときは、非常に嬉しかったのを記憶しております。それからも何回か獲らして頂いてますが、決勝まで行くのがなかなか大変で、1回戦の18ホールでコロッと負けることもありますし、安藤さんにも、もーうっ、見事に負けました。優勝した翌年でしたか。でも、マッチプレーはそれまであまり得意でなかったんですが、徐々に心技一体になるコツが少し分かるようになりました。

五嶋「それでは、同じく５回の上田さん、ご自身の立場からどうしてこんなにお強いのですか」

上田「いいえ、これはまぐれでございます」

上田「まずはじめに、この倶楽部に入れて頂いた時のお話しをさせて頂きたいんですが。主人がこんど大川さんがゴルフ場をお造りになるよと、大川さんがお造りになるゴルフ場は絶対推奨される名コースになるだろうと。だから、ぜひとも入れて頂きたいということで大川さんのご自宅に二人で押しかけてお伺いしたのが始まりなんです。それから、たびたび工事中もオープンを楽しみに二人で見学によく現地まで足を運びました。それが入会の動機なんですが、今年ＪＧＡが主催いたしました全日本レディースシニアゴルフ選手権の予選会がオリムピックでございまして、出場させて頂きましたが、その時に参加された選手から私に『あなたって、本当にいいね！』と言われまして『こんな広くて素晴らしいコースで、素晴らしい設備があるコース、あんたって本当に幸せね』と。一人はハンディ５で、もう一人の方は６でとてもレベルの高い方なんですが、そういった方に言われて、『そうだったんだ・・・』と本当にしみじみとこのコースが良いということをビジターから教えられ、とても誇りに思いました」

川島「技術論はありませんでしたが、(笑い)後ほどまとめてお聞きしましょう」

五嶋「それでは、同じくたくさん勝っておられます安藤さん、僕らはあなたにようけ取られましたけれど(笑い)どうぞ」

安藤「私は、ちょっと年がいっておりますので、何とか永久的に倶楽部の看板に掛かる競技に勝ちたいと思い挑戦してたんですけど、なかなかうまくいかない。まー、体力的な問題ですかね。技術的な面は相当自信があったんですけど、西村さんが最初のオーナーズカップ、大川さんのカップですね、三大競技のひとつ、その看板に揚げてくれたんでほっとしてるんですけど、私は他で揚げようと一生懸命やってたんですが無理で、ちょうど６０歳の時にひとつぐらい看板揚げようとシニアのほうで出まして、勝たして頂いたんですが、そしたらですね『あなた６０歳？　シニアでないでしょう』と言われまして、(笑い) しかし、体はシニアでもう一年シニアに出さしてもらったら、また獲ったんですが。それからまた、チャレンジ精神言うんですか、まだ発展途上だと思い今度はクラブ選手権に出ていったんですが、やはり無理でしたね。それで、去年またシニア選手権のほうへ出さして頂いて、たまたま勝てたと言うことなんです。これでやっと永久的に看板が揚がったなと喜んでおるんですけど、平成７年のクラブ選手権でメダリストを獲った時は、これは調子いいから獲れるとかと思ったんですけど、やっぱり無理ですね、年齢的に。もう６７歳ですからシニアも、もう一無理ですね」「はーもう・・・」

上田「まだまだ、お若いのに」

五嶋「寂しいこと言わないでくださいよ」

一同「ワッハハハ」

五嶋「僕とおない年なんですよ！」

大川「そんなことない。昨日見たら、年が30そこそこの人より、ずっとオーバードライブするもん。すごいよ、最近、特に距離が伸びて」

西村「まだ、大丈夫ですよ。もういっぺんレギュラー来る？(笑い)」

五嶋「僕が知ってる西村さんは、体が大きいスポーツマンだからアバウトな人だと思っていましたが、この前ご一緒したとき、とても研究熱心でいらっしゃいますね。こうだ、ああだと言われて、とたん、僕はガタガタになったんですが(笑い)」

「開場の翌年にオーナーズカップを獲られて、その後クラブ選手権にも挑戦されてると思うんですがいかがですか」

西村「難しいですね、残念ですが」

コースの攻め方

五嶋「どうでしょうか、一言づつこのコースの攻め方をお強い方々からお聞きしましょうか、まず大谷さんいかがですか」

大谷「このコースを攻略するには絶対飛距離というのが必要ですよね、7,250ヤードあるんですから。ちょっとスカタンするとたちまち崩しますし、飛距離を伸ばすように飛ばす方法、少々曲がってもいいから飛ばすことから入らないといけないなと当初思いました」

五嶋「西村さん、どうですか」

西村「僕は、遊びのときに意識をしてスライスでいくとか、今日は全部ドローぎみで打とうとか考えてやるんですが、その時は結構スコアいいんですよ。ただ、こう言った試合のとき、それを忘れてしまって。大谷さんが言った距離を求め過ぎてよくないですね。オリムピックはどちらかの球と決め球で曲げて攻めないと、真直ぐのイメージで打ってると、どこかに落とし穴があります」

五嶋「以前、かなりうまい人からオリムピックは、『大川会長がフェード打ちだからフェードを打つ人にはいいけど、左にいくフッカーには難しいコースだよ』と言ってましたが、そう言う事ありますか？そう言ったことを意識して設計して造られましたか？」

大川「うーん、そういったことは意識して造ってません」

五嶋「造ってない。はあ あー・・・」

西村「ドローを非常にうまく打てたら有利ですよね。きちんと打てたら。フックになるとだめです」

大谷「フックの出る日はスコアにならないね」

五嶋「恥ずかしながら、僕は今まで一度も18番でツーオンしたことがないんですよ。白マークが最近もっと前にいきましたから非常にありがたいんですが、フルバックはもっと後ろに下げたでしょう。どうしてそんなことするのですか？(笑い)」

安藤「15年を迎えて、その間コース攻略を自分なりに持っていたんですが、例えば11番なんかは一生懸命2オン狙っているんですけど、高橋プロが言ってますが8割のらないものだと思って攻める、そう言う感覚でいくと以外にうまくいきますね。西村さんが言われるように、決め球で攻めていかないと攻めきれないですね」

五嶋「大川会長の設計の意図がそう言ったところにあるのでしょうね」

大川「どのホールにも逃げ道は、必ず作ってある。そして、その場所その場所で攻めるときに、その設計した意図を読み取り打っていかなければ、スコアにならない。例えば、１４番の場合、自分の距離に合わせてどうぞ打ってくださいと。クラブは全部ドライバーで打つ必要がないんですよ、ティショットで。刻んで打っていくなら、いくらでも逃げ道があるんですよ。飛ぶ人は直接狙いなさい、ただ狙うのは危ないですよ。全て、ワンホール、ワンホールに意図するルートがあるんです。
３番なんかの場合、セカンドでこすったスプーン打つのは、これ、やっぱり、初心者ですよ。(笑い)『ちゃんとしたボールを打って！』って、『こういったところで、しっかり練習しなさい！磨きなさい！』ということなんです。ゴルフコースの設計というのは、意地悪に見えるでしょう。自分の言うこと聞かないと怪我しますよ。これが設計するひとの意図するなかに入っている」

五嶋「自然と考えてプレーするようになるんですね」

川島「そのように自分で作られたコースをまわられて、この頃はどのように思われますか？」

大川「ちょっと 長すぎるなー と」

一同「ワッハハハ」

大川「飛ばんようになったって(笑い)」

上田「15年も以前に距離の有るチャンピオンコースを計画され造られたのは、さすが先見の明がお有りになる事と思います」

大川「その当時はまだ飛んでましたから ウフフ」

川島「一番難しく造り過ぎたなと思われるホールは何番ですか？」

大川「えー 私は、皆さんが難しいって嫌ってるホールはみんな好きなんです。8番なんかはあれはね、ボールが左にあまりいかないようにもっと簡単に作れるんだけど、わざわざおいてあるんです。あーいったところでうちの選手は腕をあげるんだと思っているんです。
14番もそうですし。例えば、5番なんか短

くて嫌でしょう。アベレージ良くないですよ。あーいったところで自分のクラブの選択及び自分の腕とその日の調子、全てをちゃんと相談して、そして設計をたててから打てるのがいいプレーヤーなんです。そういう意味で皆さんが嫌ってるホールがみな好きなんですよ」

五嶋「資料を見ますとインタークラブ決勝で6位が最高ですか、今までに。これからもう少し大川会長の意向を汲んで練習なさって、大谷さんや強い皆さんはオリムピックの名誉のために、もっと頑張ってもらわないといけませんね（笑い）」

大川「お願いします」

一同「ワッハハハ」

五嶋「レディースからみていかがですか、距離の問題とか一番大きいですか？」

上田「レディースの場合、月例競技が今全部赤マークからですが、オフィシャルのゲームに出ますと5,800、6,000を超えますので、若い方も上手になられたら、普段の練習でゴールドやフロントの距離で練習できる機会がもっとあったほうがよろしいのではと思います。私、10年以上前に厚かましく女子の公式戦にずっと出ておりますときに、やっぱり距離を出さないといけないと感じておりました」

大川「ティマークの件は、これから競技委員会で考慮して下さい。レディース競技会の使用ティをたまには後ろのゴールドとか或いは白とか使うように検討しましょう」

すばらしいクラブライフを目指して

五嶋「オリムピックゴルフ倶楽部は我々会員からすると、テニスコート、プールを造られたり、焼肉レストランですか、何よりも温泉を造って頂いて本当によかったと思うんですね。えー、それ以外に皆様から全会員を代表するような気持ちで、要望をお聞きしたのですが」

大川「一番聞きたいことです」

川島「僕からいいですか、会長がいつも『うちのゴルフ場』とおっしゃるんですが私も同じように言ったりするんですけど、多くのメンバーがゴルフをさせてもらってる、あるいは、してるだけの人が多くて、本当に自分のゴルフ場で楽しんでゴルフをしている、というメンバーさんが少ないように思うんです。せっかくいいゴルフ場を造って頂いたんで、もっと我々が有効に使っていくべきだと思うんです。で、今年の開場記念のパーティで大川理事長が挨拶されたお話のなかでハードの部分はほとんど完了したので、これからはソフトの部分を作り上げたいとおっしゃってましたが、ソフトの部分というのは我々会員が作っていくべきものだと思うんです。そのなかで、例えば会員の賛同でコースに花を植える話なんかも五嶋委員長としているんですが、こういったことがこれから大事だと思うんですが」

西村「私、よろしいですか。僕が最近つくづくオリムピックで思うのが高齢化。メンバーも本当に高齢化していってるって、この１５年ですごく感じているんです。ここで提案なんですが、メンバーさんの直系のジュニアを優待するような策を講じて、将来の会員予備軍の育成を真剣に考えないといけない時期だとつくづく思うんです」

花いっぱい運動

五嶋「さっき、お花の話が出たんで、皆さんのご賛同を得られればと思うんですが、フェローシップ委員会で、自分たちがこのゴルフ場を愛してる証として、会員皆さんのご協力を頂いて、『花いっぱい運動』をしたらどうかと企画してたんですが、聞いてみると色々と問題があり進んでないのですが、何かよい方法を考えてぜひとも『花がいっぱい咲くコース造り』をしたいですね。皆さんいかがですか？」

西村「よろしいですね。ぜひやりましょう」

安藤「大賛成です」

静かなクラブハウス

五嶋「私からのお願いとして、オリムピックはクラブハウスが静かでいいですね。ゴルフ倶楽部は静室でないといけないと思いますので、これからも騒がしい雰囲気にならないようにマナーに厳しく静かな倶楽部をぜひとも維持して頂きたいですね」

挨拶

五嶋「なにか他にも皆さんございましたらどうぞ」

上田「フェローシップ委員会への希望ですが、私どもがゴルフを始めましたのが何１０年も前なんですが、まずマナーとルールを身につけてからコースに出ましょう、というのが一番初めに教えられた事なんですね。でもこの頃はそういったこと難しくて仕方ないとは思うんですが、オリムピックのメンバーは、いつもにこやかにビジターの方にもどなたがいらっしゃっても、みんなで朝の挨拶はちゃんとしましょう、とか言うことを会員の皆さんに書いて頂けたらいいなあと思います」

オリムピックのメンバーであることの誇りと自信

大川「私からメンバーの皆さんにお願いしたいのは、名門コースと言われている倶楽部のメンバーさんたちは、自分のコースのメンバーであることに誇りと自信をお持ちなのですが、悲しいかな、うちのコースのメンバーさんたちはその気持ちが少し足りないんじゃないかと、いつも私、悲しく、寂しい思いをしているのです。というのは、昨日もある人から文句を聞いたんですが、何かといえばビジターの人が2球でプレーしてプレーが遅いと文句を言ってるんですよ。で、それがさっきあげた名門コースのメンバーさんである場合は、見つけたら直ぐに『2球でプレーしたらだめですよ。前の組について行って下さいよ』と堂々と言うんですがね。そのように、メンバーさんがこのコースの主である気持ちを持って頂いたら、だんだんとマナーもよくなり、このコースに来たらうっかり出来ないな、という宣伝になるんですがね」

上田「先日の総務委員会でこのような話が出て、委員の皆さんが来場された日はプレー後にコース・マーシャルの協力を頂こうと皆さんで話し合ったところです」

五嶋「一番いい話が最後に出ましたね。会報誌を通じて皆さんにそのことを知って頂いて、皆さんでマーシャルをすればよろしいですね」

安藤「さきほどの上田さん話の続きなんですが、年2回発行してます会報誌に会員の入退会の紹介を載せて頂きたいですね。入会者は写真と経歴入りで」

五嶋「そうですね、メンバーの動静は会報誌の使命ですから、入会なさったかたは会報誌に載せるべきですね」

クラブライフ

川島「結論は、ハードの部分はできましたので、今度は魂を入れていけない時機だから、それには色んなアイデアがあると思いますが、今度発足された総務委員会とフェローシップ委員会、その他の委員会が中心になって会員のみなさんと一緒にソフトの部分を盛り立てていくことだと思います。その中で一番大事なことは、出てきたアイデアがこれはこういった理由でやめます、やります、といったアクション、返答をすることが大事だと思うんです」

大川「言いにくいことはご意見箱をだしてありますから、どんな事でも結構ですので、どんどん出して頂くようにお願いします」

五嶋「これから、オリムピックゴルフ倶楽部がますます誇り高き倶楽部になるよう、会員みんなで育てていきましょう」

「本日は、貴重なお話、ご意見を頂きありがとうございました」